

追求・後悔尺度による意思決定スタイルの測定と年代に  
よる意思決定スタイルの相違点について

—尺度の信頼性と自己肯定感意識尺度との関係に関する検討—

伊藤誠悟ゼミナール

経営学科 4年 鴻野純哉

現代の意思決定論は大きく2つに分かれている。その2つとは合理性等を基準に、バイアスのない状態での「あるべき、合理的な意思決定」を導き出す分野である規範的意思決定論と、現実の人の意思決定は、規範的意思決定論が示すようにはいかず、なぜ人は合理的に意思決定ができないのか、そのバイアスをあぶりだす分野である行動意思決定論である。人の意思決定は常に合理的な意思決定をすることが理想だが、それは現実には難しく、実際に人の意思決定に近い理論としてあるのが行動意思決定論である。サイモンも提唱したように、人の意思決定は、限定された情報の中である程度受け入れられる(満足できる)ところで意思決定されるのである。したがって、人が意思決定をする際、実際に想像していたものとは違ったり理想とかけ離れていたりすることが多々あると考えられる。そのため、自分の意思決定に「後悔」の感情等が生まれる場面があると考えられる。本研究では、意思決定に関する人間の感情や、意思決定をする際の人間の行動に着目し、研究を行うことで意思決定をする(した)際の人間の潜在的感情・考え方を明らかにすることを目的とした。

調査1では、205名(詳細は論文に記載)を対象に因子分析を行い、和訳した Schwartz et al.(2002)追求-後悔尺度で作成された質問で、大学生から社会人までを対象にデータを収集し、自分なりに尺度の信頼性を検討することを目的とした。

調査2では、183名を対象に因子分析を行い、都築(2008)の日本版追求-後悔尺度の因子分析と自己肯定意識尺度に関する因子分析とを比較し、検証することを目的とした。

調査1の結果は、先行研究ほどの信頼性( $\alpha$ 係数)は得られなかったが、本調査で抽出された3因子については、磯部ら(2008)で抽出された因子と対応していた。Schwartz et al.(2002)の研究では、追求-後悔尺度間の有意な正の相関関係が報告されたが、本調査でも同様に有意な正の相関が報告された。(Table3 参照)

調査2の結果は、信頼性係数( $\alpha$ 係数)は高く、概ね高い信頼性及び一貫性を持った分析にすることができた。都築(2008)と比較したところ、後悔(購入)尺度の平均値は、本調査の方が数値が低く、年齢を重ねることによって、商品やサービスを購入するときに感じる可能性がある後悔の感情を抑えられると考えられた。

今後の課題として、幅広い年代の方に調査を実施し、分析を行うことでより根拠を持った研究にすることができると感じた。(993字)